

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中国の「国境文化」の人類学的研究

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5668 |

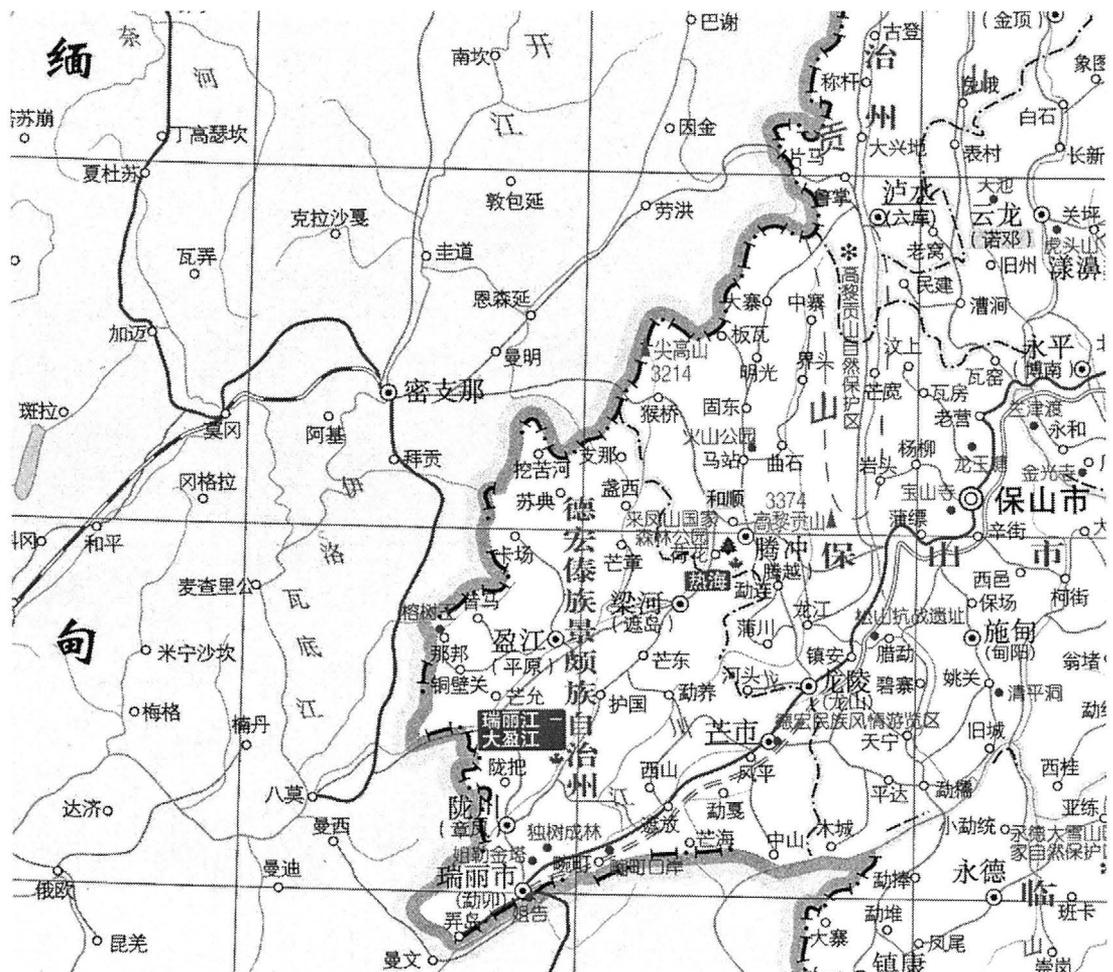
中国・ミャンマー国境地域における 流動人口・ネットワーク・ローカル権力

雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州の事例を中心に

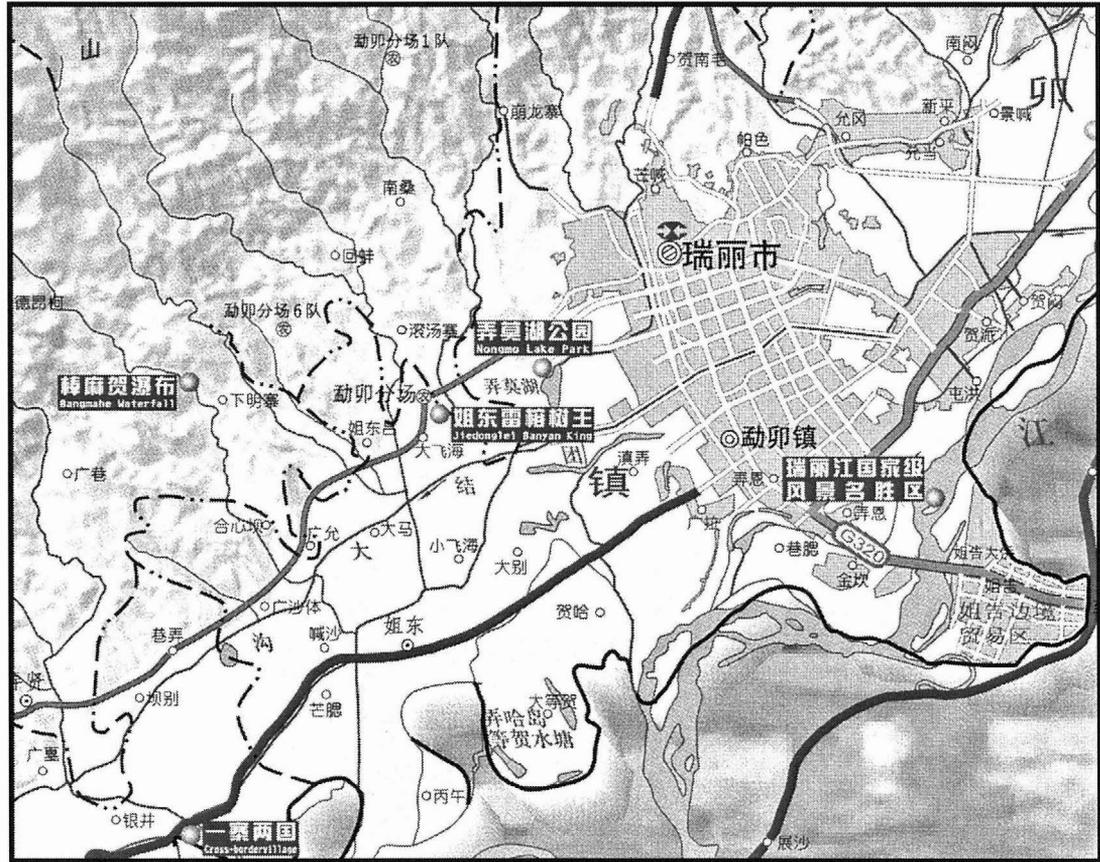
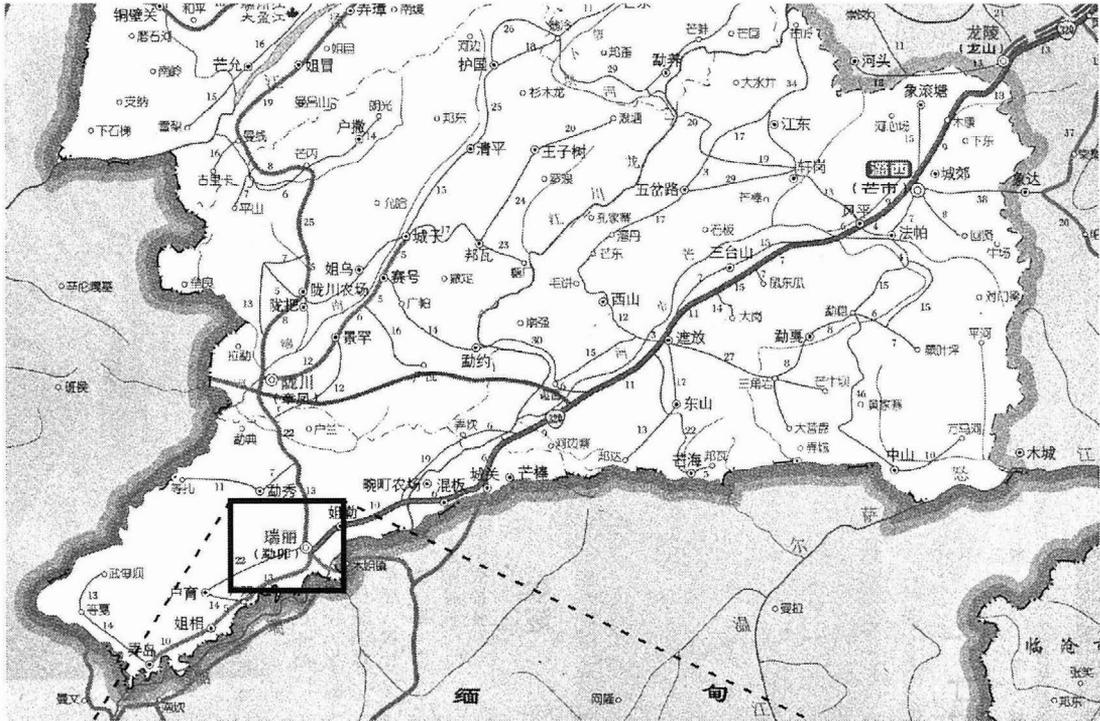
長谷川 清 (文教大学)

1 はじめに

雲南省はミャンマー、ラオス、ベトナムと国境を接し、自然地理や多民族的構成において連続性がある。社会主義体制をとる中国が改革開放政策に転じると、これらの東南アジア大陸部に連続した国境地域では、国境を跨いで展開されるローカルな人的交流や日常的な諸民族間の相互関係は、集団化政策のもとでの社会経済システムやローカルな権力関係を基盤とした閉鎖的なそれとは大きく相違するものとなり、開放的な関係性へと転換を遂げていった。市場経済メカニズムの段階的な導入により、国境を越える様々な社会文化現象や新たな地域間関係が出現していくのである。1980年代後半の移行期を経て1992年に全方位の対外開放体制が始動すると、その傾向はいつそう顕著なものになった。



地図 1: 徳宏州及び瑞麗(勐卯)の位置



地图 2: 瑞丽市街区的概略图

畹町、瑞麗、河口など、国境地域に位置する主要な地方都市は開放地区に指定され、沿海部と同等の経済的な優遇措置や政策を受けるようになり、「口岸」（国境貿易拠点）が建設されていく。その結果、雲南省の国境地域では、開放的なフロンティア空間への質的転換がローカルな政治権力にとっても重要な課題となっていく。多くの口岸では、国境に跨った局地経済圏や経済合作区の建設が推進されていくことになったのである。

本報告は、タイ族とジンポー族による連合自治の形式によって1956年に成立した徳宏タイ族ジンポー族自治州の瑞麗地区（県、後に市に改称）を対象に、国境貿易や経済開発を推進するなかで顕著な現象となってきた、国境を跨いだ人口移動の実態や漢族移民のネットワーク、定住による都市的コミュニティの形成、ローカル権力との関係等について、現地調査で得られた知見や資料をもとに、初步的な整理を試みるものである。こうした視角からの考察は、おそらく外来の移民集団とエスニック集団との交錯過程の中から今日生成しつつある異種混交的な様相を一つの属性とする「国境文化」のありようを明らかにする上で有益であろう。少なくとも、筆者がこれまで現地調査を通じて関わってきた雲南・ミャンマー国境地域のローカル社会では、個別村落を対象としたミクロレベルの社会文化動態を解明していく上で、その前提作業として不可欠である。

以上のような問題関心から、小論では徳宏タイ族ジンポー族自治州（以下、徳宏地域・徳宏州とする）の瑞麗での現地調査の知見をもとに、同地区における人口動態、漢族移民のネットワーク、都市への定住化やコミュニティ形成、ローカル権力との関係などに関係する基礎資料の整理を行うものとした。勐卯盆地（ムン・マーウ）は南西タイ諸族の一派であるタイ・マーウ（Tai Mao）の主要拠点であり、勐卯土司の拠点であった。早くタイ系王国（ムン・マーウ）が台頭し、雲南省からミャンマー・シャン州にかけて支配を広げたとされ、その意味で勐卯という地名は同地のタイ族にとって特別な意味を帯びている。中国側とミャンマー側に分けられる盆地空間は、彼らの伝統的な地理的観念においては国境によって境界づけられる近代的な国家空間とは異なった位相のなかにある。

II フロンティアと境域社会の動態

1. 土司社会の形成と変容

徳宏地域は雲南省の西南部に位置し、ミャンマーと国境を接している。歴史的には、早くから内陸交易ルートの中継地として、多様なエスニック集団が交錯しあう中で、ローカル社会が形成されてきた。中国内地から移住してきた漢族も相当数居住しているが、タイ族やジンポー族、アチャン族、リス族、ドアン族などが土着の集団であった。特に、タイ族は中国王朝の土司制度のもとで土着の政体（ムン）を形成し、山間盆地を基盤とする封建的な政治体制を形成した⁽¹⁾。

徳宏地域に対する間接統治が本格化するのには13世紀以降であり、元朝による雲南行省の設立が重要な契機となっている。元朝は茫施、平緬、麓川各路を設置し、南甸地域（梁河）に軍民総管府を置いたが、タイ族の首長に土司官職を与え、中華帝国の政治秩序のなかに組み込んだ。明朝もこの制度を踏襲し、たびたび軍事制圧を試みる一方、3宣撫（南甸、干崖、隴川）、2副宣撫（盞達、遮放）、2安撫（勐卯、芒市）を設置した。また、辺疆防備のために八関九隘を設置し、屯田を各地に築いた。清朝は明代の統治体制を継承したが、さらに2長官司（臘撒、戸撒）と勐板土千総を置いた。こうした徳宏地域の10土司体制は民国期に至るまで存続し、ローカルな権力政治の中核を形成した。これに対し、中華民国になると、雲南省政府は騰越道を騰冲に設置（1914年）し、さらに各地に弾圧委員会を置き、農業生産、開墾、商業、交易、司法、教育などを扱うようになった。この統治機構は行政委員会（1915年）に改められ、雲南省第一殖邊督辦（1929年）を経て設治局（1934年）へと変更された。その後、潞西（芒市、遮放、勐板）、梁河（南甸）、盈江（干崖）、蓮山（盞達）、隴川、瑞麗（勐卯）からなる6つの設治局が置かれたが、旧来の土司統治と漢族地域に対する直接統治を組み合わせた政治権力を形成するものであった〔徳宏州政協文史和学习委員会（編）1997〕⁽²⁾。

2. 漢族移民の諸相

雲南省は土着のエスニック集団が多数居住し、ローカル社会が形成されているが、もう一つの側面は、漢族移民の波動的な進出が展開された「国内植民地」でもあった。中国内地からの漢族移民は、ローカル社会の複合的な編成をもたらしたのである。明代以降、こうした地域の住民集団は「軍戸」「民戸」「土戸」に区分され、別々に管理された。管理体制は錯綜していたのである。タイ系土司地域では15世紀に大規模な軍事遠征（三征麓川）が展開し、民族間関係を大きく変容させたが、漢族移民の流入が屯田政策や改土帰流政策のもとで進行し、入植地域は拡大の一途を辿った〔方鉄・方慧 1997〕。

徳宏地域への漢族の移住は商業・交易の進展と深く関わってきたが、辺疆防衛のための軍事移民も看過できない。防衛上の重要拠点には軍屯が置かれ、中国内地からの漢族を入植させた。彼らは防衛の任務を果たす一方で、土地の開墾や農業生産に従事し、移民村落を形成した。こうした移民村落は徳宏地域に分布しているが、乾隆期（1711-1799年）を境に増加した。彼らは「瘴癘」から身を守るために、タイ族の集落が多く分布する海拔高度の低い盆地を避け、生活に適した気候の山地や丘陵地に居住する傾向があった〔周琮 2007〕。

清代の光緒期（1875-1908年）には、開発が進んだ騰沖とバモーの間で交易路が発展した。その沿線には漢族商人や各種の手工業者が進出し、しだいに集鎮（街市）を形成して「漢夷雜処、街市繁盛」という状況を出現させるに至った〔蒼銘 2004：47-49〕。馬の隊商（馬幫）の往来で繁栄したのは、①ミッチーナ—騰沖—永昌、②ミッチーナ—バモー（八莫）—盈江—騰沖、という路線であった。ミャンマーから騰沖に運ばれた商品は多種多様だが、その中で翡翠交易はきわめて重要であった。翡翠の原石は騰沖に運ばれ、そこで装飾品などに加工されたが、一部は大理、昆明に運ばれた。翡翠交易は漢族商人に巨額の富をもたらした。日中戦争が開始される前、騰沖には多くの翡翠商人が集まり、「百宝街」とも称されるほどであった⁽³⁾。

交易ルートとタイ系土司地域の関係を見ておこう。盈江はタイ系土司の重要な拠点であり、刀安仁の出身地として知られる。1894年、イギリスは盈江の芒允口岸に領事館と税関を創設したが、1909年、ミャンマーからバモーを経て盈江へと至る道路を整備した。交易者の往来は盛んになった。新城街（土司所在地）、旧城街、弄璋街、小辛街、姐冒街、団坡街、蓮花山街（盞達街）、太平街、芒允街などは当時、漢族移民が多く居住した拠点である〔盈江県志編纂委員会（編）1997：562〕。

ミャンマーとの交易ルートの整備で発達したのは章鳳である。章鳳は隴川土司の統治地域であったが、騰沖—梁河—隴川—バモーというルートの重要拠点となった。1885年、イギリス人がバモーを占拠して以後、章鳳からバモーに至る中継ルート上には洋人街が形成された。ミャンマー側からの外来物資はかならず洋人街から章鳳に入ってきたと言われるが、当然のことながら、同地では漢族商人の進出がみられた〔徳宏傣族景頗族自治州商業局（編）1991〕。

3. 勐卯土司の状況

上に見てきた盈江や章鳳では清代末期から中華民国期にかけて交易ルートが整備され、漢族の商人や移住者の居住地が形成されていたのに対し、勐卯土司の統治拠点（写真1）はどのような状況であったのだろうか。勐卯土司の官署があった勐卯街、ナムカムに隣接した弄島街が当時の主要な集鎮（街市）であったが、山地を除き、漢族移民の進出はほとんど見られなかった。同地区において漢族の移住は、明代の軍事制圧（三征麓川）以後である。軍屯を設置して漢族の兵士を駐留させたと言われるが、しかし、民国期の時点での漢族人口は、梁河や盈江などと比べると、多くはなかった〔長谷川 2010：54〕。その数は千人ほどであったとされ、総人

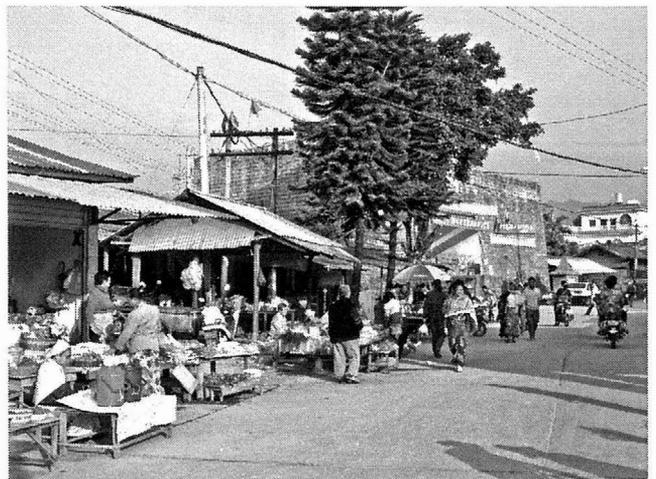


写真1：旧勐卯鎮（老城市）

口の1%にも達しておらず、1950年代に「解放」を迎えるまで、漢族人口は多くなかった。1950年5月、瑞麗が「解放」され、18代続いた勐卯土司の統治体制は解体した。勐卯土司官署の「老城子」（勐卯街）は、「解放」を迎えた時点では今日あるような状況の住民構成ではなかった。ローカルな交通体系も他の土司地区に比べれば未整備であった〔雲南省瑞麗市志編纂委員会（編）1996：689〕。

III 国境を跨いだ交流の変遷

1. 瑞麗地区の多民族構成と社会概況

1932年、雲南省民政庁は中国領の部分勐卯から瑞麗に名称を改めた。行政的な区分は大きくみれば、民国期以降、何度かの変更があった。2008年度の時点の行政区域は、①3区：瑞麗市姐告边境貿易区、瑞麗市边境経済合作区、畹町経済開発区、②3鎮：勐卯鎮、弄島鎮、畹町鎮、③3郷：戸育郷、姐相郷、勐秀郷、④29村委会、⑤283村民小組、という編成である。国営瑞麗国営農場実業集団総会社の管轄下、勐卯、賀腮、弄島、雷允、卡蘭、莫里に6つの分公司がある。畹町経済開発区は1999年5月1日に成立し、後に瑞麗市区に編入された。2005年10月に姐勒郷を廃止し、勐卯鎮に編入した⁽⁴⁾。

瑞麗はミャンマーとの国境地域に位置し、タイ族、ジンポー族、ドアン族、リス族、アチャン族、漢族などが居住している。1980年代以前と比較した場合、瑞麗江沿いに開けた平地部に急速な人口集中が進行した点が顕著であるが、それは後述するように、1990年代からミャンマーとの貿易拠点となり国家級の国境貿易都市（边境口岸城市）として都市区域が拡大され、大規模な都市建設が進められてきた結果である（写真2）。

瑞麗のローカル都市としての発展は、1985年2月、徳宏州人民政府が徳宏州全域を国境貿易によって発展させるという開発戦略を打ち出し、州レベルの対外開放政策に積極的に推し進めたことがもたらした。この政策転換によって、国境を跨いだ経済活動が加速され、徳宏州は中国全土でも有数の貿易額を誇る都市へと発展していくのである〔畢世鴻 2010〕。

貿易活動は、国境貿易、边境小額貿易、辺民互市の3つのタイプに区分されるが、瑞麗は国務院の批准を受けた「一類口岸」にランクを上げられ、それにふさわしい

基盤整備と都市建設が進められていく。その象徴ともいえる開発プロジェクトが姐告貿易区の建設である。この点については後述する。ミャンマー政府は中国側における姐告貿易区の都市整備の進展とあわせて、1998年3月「珠宝玉石」（翡翠などの宝石類を指す。以下「珠宝」と表記する）の中国側への貿易拠点をムセー（木姐）だけに限定した。これは瑞麗の発展をさらに促す結果となった。「珠宝」貿易の従事者を瑞麗に集結させたからである。瑞麗市政府は2000年、「東方珠宝城」という地域ブランド化戦略を策定し、「珠宝」産業の育成を地域経済の中核に位置づけ、翡翠の集散地としての機能の整備と拡充を図っている〔何春嶸 2006〕。

細かな検討は後で行うとして、人口構成の変遷を確認しておこう（表1参照）。1980年代に入り、瑞麗における住民構成の状況は流動人口が加わることによって質的にも大きく変容していく。それは国境貿易ブームによって引き起こされた外来移民の流入現象である。2007年度の統計資料では総人口167046人、漢族49104人、タイ族55779人、ジンポー族13745人、ドアン族1788人だが、特に注目したい点は漢族が勐卯鎮に集中しているという点である（表2参照）。後述するように、四川、湖



写真2：瑞麗口岸

表1：瑞麗地区の民族別人口の変遷

| | 1951年 | 1958年 | 1978年 | 1988年 | 1990年 | 2007年 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 漢族 | 2406 | 4660 | 27027 | 30527 | 31797 | 90071 |
| タイ族 | 17668 | 9228 | 25886 | 35161 | 37005 | 55779 |
| ジンポー族 | 8250 | 4368 | 7656 | 9764 | 10272 | 13745 |
| ドアン族 | 391 | 300 | 646 | 99 | 1039 | 1788 |
| リス族 | 36 | 62 | 139 | 268 | 378 | 904 |
| アチャン族 | — | — | — | — | — | 243 |
| その他 | — | — | 779 | 1041 | 1148 | 4516 |
| 総人口 | 28751 | 18618 | 62133 | 77711 | 81639 | 76975 |

(出所)瑞麗市志編纂委員会(編)1996:101、中共瑞麗市委・瑞麗市人民政府2008:654に基づき、筆者が作成。

表2：瑞麗市の人口構成（2008年度）

| 民族 | 勐卯鎮 | 姐告区 | 姐相郷 | 弄島郷 | 戸育郷 | 勐秀郷 | 碗町鎮 |
|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|
| 漢族 | 38039 | 2100 | 1745 | 1858 | 1880 | 5494 | 7891 |
| タイ族 | 49065 | 622 | 14379 | 9669 | 31 | 10 | 3990 |
| ジンポー族 | 6006 | 13 | 28 | 897 | 4816 | 4578 | 714 |
| ドアン族 | 457 | — | — | — | 563 | 558 | 404 |
| リス族 | — | — | — | — | 67 | 208 | 35 |
| アチャン族 | — | — | — | — | 30 | 13 | 37 |
| その他 | — | 22 | — | — | — | — | — |

(出所)[徳宏州史志弁公室(編)2009:145]に基づき、筆者が作成。姐告区については、2005年の人口統計である[郭家驥2010:242]。

南、河南、広東、浙江、福建など全国各省から移住してきた人びとが多く居住し、瑞麗を構成する主要な移民集団となっている。流動人口をめぐる諸問題の解決はローカル・ガバナンスのあり方を左右する政策課題である。

2. 国境の画定

国境線の存在は、瑞麗を特徴づける重要な地政学的要素の一つである。勐卯盆地は瑞麗江によって南岸と北岸の行政地区に分かれると同時に、平野部に中国とミャンマーの国境線が引かれ、地政学的に複雑な形勢となっている。ミャンマーとの間には全長にして169.8kmの国境線があり、「界碑」(国境を示す碑)が要所要所に立てられているが、国境の存在を可視化する役目を果たしている。河川(瑞麗江、ナムワン河)が国境となっている部分とそうでない部分に分けられる。後者は瑞麗江北岸の平野部(多くはタイ族の聚落と水田地帯である)が該当するが、姐告地区だけが瑞麗江の南岸で「飛び地」となっている。

中国と大陸部の東南アジア諸国とを区分する国境の画定は、同地域における植民地体制の成立と直接的な関係があり、19世紀後半にイギリス、フランスと清朝との外交交渉の結果、実体化してきたものである。ミャンマーに対するイギリスの植民地統治(1885年)が始まると、辺疆防衛や少数民族地域の直接統治化が為政者にとって重要な政治課題になった。歴史上、中国とミャンマーの間には、王朝時代では領土をめぐる明確な境界があったわけでない。ミャンマーの植民地化は、それまで政治的な緩衝ゾーンの役割を果たしてきたタイ族土司の統治地域に、国境画定を通じて国家空間への帰属という問題を持ち込むことになった。徳宏地域からミャンマーのシャン州へと広がる多民族的な地理的ゾーンに対し、当時のイギリス人はミャンマー・シャン州(Burmese Shan States)と中国・シャン州(Chinese Shan States)という地域区分上の見取り図を描いていたが、イギリスと清朝との間でタイ族土司地域は係争地となっていく。勐卯(ムンマーウ)盆地もこうした係争地の1つであった。すなわち、勐卯盆地(ムン・マーウ)の中央を流れる瑞麗江(シュエリー江)と南碗(ナムワン)河の合流する一帯は歴史上、勐卯土司によって管轄されてきた。しかし、イギリスはバモー・ナムカム(南坎)間の道路建設に着手し、同地区(「勐卯三角地」と呼ばれる)の永代借地権を清朝側に要求した。この問題をめぐる紛糾は、イギリスがミャンマーから撤退し、ミャンマーが独立した後も境界未定地域は中国・ミャンマー両国の領土問題として引き継がれた。周恩来やウー・ヌラの両国首脳は会談を重ね、1961年7月、中国・ミャンマー間での、この「勐卯三角地」を含む、すべての国境画定を完了させたのである。勐卯盆地に関しては、勐卯三角地の領有権を中国側が放棄し、ミャンマーへ割譲することで決着をみた[朱昭華2007、長谷川2009a:138-140]。

国家間の国境画定という問題は、この地域にあってローカル社会を生きる人びとも関わってくる。往来の要所には、舟着き場「渡口」(舟着き場)や「通道」(陸路による流通・往来の拠点)が盆地中央部を蛇行する瑞麗江に面して、あるいは隣接しあう村落間において制度化されることになるが、

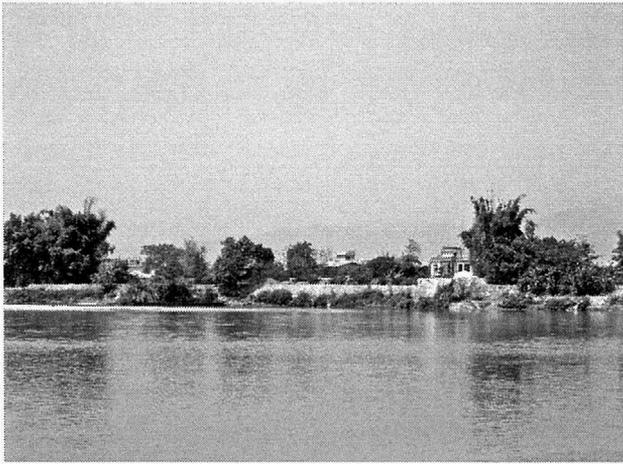


写真3：瑞麗江沿いの舟着き場（金坎村の渡口）



写真4：中国・ミャンマー間の通道（姐告）

表3：中国・ミャンマー間の交流形態（瑞麗地区）

| 交流地点 (中国領村落) | 施設形態 | 施設建設年 | 移動手段 | 所在地 | 往来区間 |
|-----------------|------|-------|---------|------|---------------|
| 勐戛 | 渡口 | 不詳 | 河川(瑞麗江) | 莫里農場 | (区間)勐戛-莫里 |
| 屯洪 | 渡口 | 1979 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)屯洪-賀双 |
| 賀派 | 渡口 | 1979 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)賀派-飛洪 |
| 賀悶 | 渡口 | 1980 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)賀悶-多来 |
| 棒蚌 | 渡口 | 1985 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)棒蚌-木姐 |
| 允井 | 渡口 | 1970 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)允井-芒令 |
| 勐卯 | 渡口 | 不詳 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)晚瑞橋東岸-西岸 |
| 広拉 | 渡口 | 1980 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)広拉-弄莫 |
| 弄喊 | 渡口 | 1980 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)弄喊-弄秋 |
| 景坎(金坎) | 渡口 | 不詳 | 河川(瑞麗江) | 姐勒郷 | (区間)姐告渡口 |
| 姐告 | 渡口 | 1979 | 河川(瑞麗江) | 姐告特区 | (区間)姐告橋兩岸 |
| 姐勒 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐勒郷 | 不詳 |
| 芒腮 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐勒郷 | (ミャンマー側)賀乱通道 |
| 丙午 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐勒郷 | (ミャンマー側)小弄門通道 |
| 大等賀 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐勒郷 | (ミャンマー側)弄馬通道 |
| 賀哈 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐勒郷 | (ミャンマー側)大掌通道 |
| 広拉 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐勒郷 | (ミャンマー側)大掌通道 |
| 姐相 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐相郷 | 不詳 |
| 銀井 | 通道 | 不詳 | 陸路 | 姐相郷 | (ミャンマー側)芒秀通道 |
| 疊撒 | 渡口 | 不詳 | 河川(瑞麗江) | 弄島郷 | 不詳 |
| 丙冒 | 渡口 | 不詳 | 河川(瑞麗江) | 弄島郷 | 不詳 |
| 弄双 | 渡口 | 不詳 | 不詳 | 弄島郷 | 不詳 |
| 広喊 | 渡口 | 不詳 | 河川(南碗河) | 弄島郷 | 不詳 |
| 南滂 | 渡口 | 不詳 | 河川(南碗河) | 弄島郷 | (区間)弄島-艾徳 |
| 雷允 | 渡口 | 1975 | 河川(南碗河) | 弄島郷 | (区間)雷允-綽林 |
| 芒滾 | 渡口 | 1978 | 河川(瑞麗江) | 弄島郷 | (区間)姐勒-芒弄 |
| 武甸 | 渡口 | 不詳 | 河川(南碗河) | 戸育郷 | (区間)武甸-董崩壩 |
| 河辺街 | 渡口 | 不詳 | 河川(南碗河) | 戸育郷 | (区間)戸育-芒那 |
| 南多渡 | 渡口 | 不詳 | 河川(南碗河) | 勐秀郷 | (区間)南多-龍崩 |
| 景湾 | 渡口 | 不詳 | 河川(南碗河) | 勐秀郷 | 不詳 |

(出所)雲南省瑞麗市志編纂委員会(編)1996:281-284、234、郭・刀1993:97、徳宏傣族景頗族自治州編纂委員会(編)1997:405、徳宏傣族景頗族自治州志編纂委員会(編)1994:655-672に基づき、筆者が作成。行政区分は1980年代後半を基準とした。村落の位置については「瑞麗県地図(瑞麗県人民政府地名弁公室・雲南省測繪局作成、1986年再版)で確認した。なお、景坎渡口は姐告大橋が開通後、使用停止。

それは起源的には人びとの中国・ミャンマー間における日常的な往来活動が生み出した生活空間の地理的な結節点である。正確な数ははっきりしないが、瑞麗江、南碗河に沿って分布する渡口、通道は30ヶ所余りである(写真3・写真4)。その中で比較的大きな渡口は姐告、屯洪、賀悶、芒滾、弄双、河辺街などである(表3参照)。中国・ミャンマー国境地域における地域住民の日常的な往来や物資交換などが行われる際の拠点であった。かつては竹の筏で河を横切ったが、後に1、2トンの木造舟に変わり、1980年代にはエンジン付きの小舟になった[雲南省瑞麗市志編纂委員会(編)1996:281]。

3. 国境管理の変遷

伝統的に勐卯盆地は国境によって二つの国家空間に区分された存在ではなかったこともあり、国境をはさんだ住民の往来は日常的に頻繁に行われてきた。中華人民共和国が成立した後もこの点にそれほど明確な断絶が生じることはなく、1950年初期から1966年まで、辺民互市と国営の外貿会社が経営する小額貿易が行われてきた。これに対し、文化大革命の開始から1979年までの期間は、国境間の交流に大きな制限が加えられ、閉鎖に近い状況であった。とはいえ、地域住民による日常的な辺

民互市だけは制約があるなかでも続けられた。こうした状況に大きな転換が起きたのは第11期三中全会の開催（1978年12月）以後である。辺民互市、小額貿易、国境貿易のいずれもが再開され、活況を呈するに至るのである。表4と表5は1979年からの1988年までの徳宏州における辺民互市、小額貿易の取引額の変遷を示しているが、1884年から急速に伸びていることが確認できよう。こうした貿易額の急速な拡大は国境を跨いだ人的交流の拡大を意味している。

以下では、関連資料によってその前後の状況も含め、この問題について検討してみたい⁽⁵⁾。1958年3月、私営の小額貿易は停止となった。それは大躍進、合作化の影響であった。商業従事者は減少したが、1958年、社会主義改造以前に勐卯街で商売をしていたのは24戸である。彼らは国営に加わるか、合作小組を形成するかを選択をした。その後、中国・ミャンマー両国間では「辺民」（国境地域の土着住民）同士の出入国の手続きを簡略化した。この時期の状況を示す以下の資料がある。すなわち、1961年10月下旬に3つの市場街（街子）で調査結果である。それによれば、10月25日には2820人、11月4日には2300人、11月9日には1850人が集まったという。その内訳をみると国内の諸民族1878人、国外の辺民445人であったが、民族的にはタイ族1120人、ジンポー族320人、小売商人（小商販）328人であった。小売商人の内訳は国内156人、国外172人であった。また、自分で生産した産品を売りに来た農民は382人である。国内の農民が363人（95%）を占めた。別な状況を示す1961年末の税務所の統計資料によると、納税者は50戸であった。内訳は、国営14戸（工業と商業）、集体8戸（主に手工業）、個人経営者29戸であった。

以上の資料から社会主義化のもとでも1960年代初期には国境を跨いだ貿易活動が存続していたことが明らかであるが、同時期における1960年代の国境地域の渡口を經由した貿易活動に関する資料も見ておこう。それは1961年10月31日の状況を示し、棒蚌、頓洪、賀門の3地点の渡口を經由した貿易品に関する資料である。当日、ミャンマー側のムセーで市が立ったが、出境者は454人であった。そして、この3ヶ所の渡口を通過した貿易品は総額1608元、18種類の物資が中国側から運ばれた。その大半は副食品であり、全体の63.8%を占めた。そのうち農産物が32.7%であった。また、ミャンマー側から運ばれた物資は総額3615元、97種類であった。日用の工業製品が多く、40.8%を占めた。その他では副食品類22.6%、農産物20%、刻みタバコと雑貨11.5%である。また、手工業品にはトタン、漏斗、石油ランプ、水瓶、飯盒などの1.1%、その他4%である。

1962年6月、県政府はムセー、ナムカム鎮区の役人を瑞麗側に招いてこの点について協議を行った。その結果、屯洪、芒滾、叠撒の3ヶ所の渡口を除いて、銀井、棒蚌を単独運営とした。1963年以後、ミャンマー側の市場では商品が不足し、瑞麗側にやってくるミャンマー側の辺民が増加した。しかし当時は中国側でも物資は多くなかったため、多くの商品は計画的に配分したという。1963年、小額貿易を専門に扱う利民商号が成立した。しかし、1965年には国営の小額貿易が停止となった。

これに対し、辺民互市については、制限された範囲内で参加できたが、辺民互市の範囲に関する規定が作られた。徳宏州政府は、国境線20km以内の範囲にある10地点の市場（集市）を互市に指定したのである。その対象となった互市には、畹町、混板、姐勒、姐相、弄島、勐卯、章鳳、拉線、昔馬、戛独（洞壁関）があるが、瑞麗に関しては4地点（姐勒、姐相、弄島、勐卯）である。1968年、辺民互市は閉鎖された。しかし、民間の私的な貿易は禁止できなかった。1968年12月、雲南省軍管会、昆明軍区は口岸検査の関連規定を決めた。また、ミャンマー華僑の入境に対する管理条項を制定し、ミャンマー側の地域住民が親戚の訪問、市場での取引（互市）、医療などの目的のために入境する場合、慣例にしたがって便宜を図るとした。

表4：徳宏州辺民互市の変遷

| 年度 | 総額 | 出口額 | 進口額 |
|-------|-------|-------|-------|
| 1980年 | 2700 | 1350 | 1350 |
| 1981年 | 3760 | 1880 | 1880 |
| 1982年 | 2086 | 1043 | 1043 |
| 1983年 | 3272 | 1636 | 1636 |
| 1984年 | 5038 | 2519 | 2519 |
| 1985年 | 22000 | 11000 | 11000 |
| 1986年 | 25000 | 12500 | 12500 |
| 1987年 | 30000 | 15000 | 15000 |
| 1988年 | 40000 | 20000 | 20000 |

（出所）鄒承文 1993：18

表5：徳宏州における小額貿易の変遷 単位：万元

| 年度 | 出口 | 進口 | 総額 |
|-------|--------|--------|--------|
| 1979年 | 61.5 | 280 | 341.5 |
| 1980年 | 1125 | 1450 | 2581 |
| 1981年 | 1450 | 2874 | 4324 |
| 1982年 | 831.9 | 1315.7 | 2147.6 |
| 1983年 | 1191.7 | 1143.1 | 2334.8 |
| 1984年 | 1766 | 2022 | 3788 |
| 1985年 | 5990.1 | 4981.9 | 10972 |
| 1986年 | 9570 | 7649 | 17239 |
| 1987年 | 18668 | 20992 | 39660 |
| 1988年 | 42666 | 25926 | 78592 |

（出所）鄒承文 1993：17-18

1971年、辺民互市は復活した。中国側の辺民に対してミャンマー側における物資購入を制限したが、他方、国外からの辺民は増加の一途をたどった。国外の辺民は糧米、豆類、油脂、油料、肉類、その他の副食品を持参して販売したが、それらの価格は中国側の互市より安かった。1974年、雲南省革命委員会は辺民互市についての規定を作った。それは、互市を国境線20km以内の範囲とし、貿易活動が許される人びとをこの範囲内に居住している者に制限し、国家幹部や職工は互市に参加できないとするものである。互市市場の物資も辺民が自分たちで生産したものに限り、工業製品の持ち込みや持ち出しを禁止した。互市での販売は1人当たり5元を超えない範囲とした。人民元が国外に流出するのを避けるためであった。しかし、国境線は出入りが容易であり、その管理は難しかった。

1978年、瑞麗県政府は小額貿易を専門に扱う利民商号を再開し、辺民互市も1人当たり5元から20元に引き上げた。民貿公司門市部が緩和策を出したこともあり、国内外からの商人は増加した。1985年、州人民政府は辺民互市の限度額を1人当たり20元から100元に引き上げた。国营、集体の単位は小額貿易を専門に扱う商号としての認可を受け、納税戸が678戸に増加した。内訳は国营57戸、集体23戸、个体598戸である。国营、集体の納税戸のうち、小額貿易を扱う商号は20戸ほどであった〔徳宏傣族景頗族自治州商業局（編）1991：106-110〕。

4. 貿易空間の制度化

中国・ミャンマー間で未解決状態であった地点の国境画定が完了し、両国政府の合意が成立した1961年以降、中国とミャンマーとの間の国境紛争は解決されている。これ以後、国境に跨って生活圈を構成する瑞麗江地区とミャンマー側の村落住民は、日常生活用品や食料品などの取引を行うことを認められたが、計画経済を軸とした農村経済において、村落住民の間で交換される物資はきわめて限定された内容であった。だが、1979年以降こうした状況に変化が生じ、しだいに中国とミャンマー間の交流は活発化していくことになった。1978年3月、雲南省人民政府は国境を管理する瑞麗辺境工作站を設置したが、それは国境管理事務を扱う部署（証検科）と金坎、屯洪、賀悶、賀派、流動、群工からなる組織であった。翌年4月、この組織は瑞麗边防検査站到改められた。1980年4月、この瑞麗边防検査站は「關於加強對出入國境通道口岸的管理弁法」を制定し、以下の地点を正式な通道、渡口とした。すなわち、①銀井—芒秀通道、②芒腮—賀乱通道、③丙午—小弄門通道、④大等賀—弄馬通道、⑤賀哈—大掌通道、⑥広拉—弄莫渡口、⑦弄喊—弄央渡口、⑧金坎—姐告渡口、⑨屯洪—賀双渡口、⑩賀派—非紅渡口、⑪賀悶—多来渡口、⑫棒蚌渡口、⑬引井渡口、である。同年10月、辺民互市の制限額が5元から20元に緩和された。1985年3月、出境手続きが簡略化され、同年7月には徳宏州の全域が開放となつて、辺民互市の制限額が100元に引き上げられ、国内外の工業製品を辺民互市で売買することも許可された。こうした国境管理の制度化とともに、中国とミャンマー間の交流は活性化していくのである⁽⁶⁾。

IV 漢族移民と帰国華僑、流動人口の諸相

1. 国营農場と漢族移民

瑞麗では、漢族移民はどのような経緯をたどつて入つてきたかを確認しておこう。移民が入植してきた最初の重要な契機は、1950年代から60年代における国营農場の建設である。瑞麗において国营農場の建設は1956年に始まった。同年2月、瑞麗に最初の国营農場を設置したが、59年5月には弄島農場、坎蘭農場も創設された。その後、1960年に瑞麗農墾局が設置され、1963年1月には国营農場瑞麗総場へと変更した。1970年4月、雲南生産建設兵団第11団を組織し、1980年10月、国营瑞麗農場農工商聯合企業公司に改めた。表6は、瑞麗における国营農場の成立年代を示している。多くの分場があり、ほとんどは山地地区に設置されたことが確認できる。

この時期の漢族移民は以下のように区分できる。すなわち、①中国人民解放軍の転業、退役兵士

表6 瑞麗農場の分布地点

| 名称 | 創設年 | 人数 | 立地状況 | 所在地 |
|--------|------|-----|------|-----------|
| 農場直属二隊 | | 115 | 不明 | 勐卯鎮 |
| 農場直属三隊 | | 134 | 壩区 | 勐卯鎮 |
| 勐卯分場一隊 | 1963 | 54 | 山坡 | 勐秀郷 |
| // 二隊 | 1960 | 211 | 丘陵地 | 勐秀郷と姐勒郷の境 |
| // 三隊 | 1960 | 204 | 山坡 | 勐秀郷 |
| // 四隊 | 1960 | 164 | 小丘包 | 勐卯鎮 |
| // 五隊 | 1965 | 190 | 山丘 | 勐秀郷 |
| // 六隊 | 1966 | 136 | 山坡 | 勐秀郷 |
| // 七隊 | 1966 | 95 | 平台 | 姐勒郷 |
| // 八隊 | 1970 | 56 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 九隊 | 1960 | 141 | 不明 | 勐秀郷と姐勒郷の境 |
| 坎蘭分場一隊 | 1959 | 108 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 二隊 | 1959 | 145 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 三隊 | 1959 | 240 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 四隊 | 1960 | 113 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 五隊 | 1959 | 134 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 六隊 | 1977 | 123 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 七隊 | 1970 | 171 | 不明 | 勐秀郷 |
| // 八隊 | 1968 | 83 | 壩区 | 姐勒郷 |
| // 九隊 | 1970 | 141 | 壩区 | 姐勒郷 |
| 賀腮分場一隊 | 1960 | 250 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 二隊 | 1960 | 149 | 壩区 | 戸育郷 |
| // 三隊 | 1960 | 187 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 四隊 | 1963 | 105 | 壩区 | 戸育郷 |
| // 五隊 | 1963 | 154 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 六隊 | 1963 | 95 | 山坡 | 姐相郷 |
| // 七隊 | 1960 | 120 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 八隊 | 1961 | 105 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 九隊 | 1960 | 130 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 十隊 | 1968 | 101 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 十一隊 | 1978 | 55 | 半山坡 | 戸育郷 |

| 名称 | 創設年 | 人数 | 立地状況 | 所在地 |
|--------|------|-----|------|-----|
| 弄島分場一隊 | 1960 | 289 | 平台 | 弄島郷 |
| // 二隊 | 1959 | 260 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 三隊 | 1960 | 205 | 丘陵台地 | 戸育郷 |
| // 四隊 | 1959 | 130 | 壩区 | 姐相郷 |
| // 五隊 | 1960 | 193 | 山洼 | 戸育郷 |
| // 六隊 | 1971 | 147 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 九隊 | 1960 | 209 | 山坡 | 弄島郷 |
| // 八隊 | 1960 | 326 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 九隊 | 1968 | 132 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 十隊 | 1964 | 134 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 十一隊 | 1960 | 97 | 平壩 | 姐相郷 |
| // 十二隊 | 1960 | 175 | 平壩 | 姐相郷 |
| // 十三隊 | 1971 | 97 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 十四隊 | 1971 | 110 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 十五隊 | 1968 | 98 | 山凹 | 戸育郷 |
| 雷允分場一隊 | 1966 | 104 | 平壩 | 弄島郷 |
| // 二隊 | 1971 | 86 | 山坡 | 弄島郷 |
| // 三隊 | 1971 | 174 | 山坡 | 弄島郷 |
| // 四隊 | 1969 | 205 | 山坡 | 弄島郷 |
| // 五隊 | 1970 | 35 | 平壩 | 弄島郷 |
| // 六隊 | 1971 | 96 | 山坡 | 戸育郷 |
| // 七隊 | 1971 | 212 | 平壩 | 弄島郷 |
| // 八隊 | 1971 | 63 | 山坡 | 弄島郷 |
| 莫里分場一隊 | 1971 | 254 | 莫里山脚 | 姐勒郷 |
| // 二隊 | 1971 | 145 | 山脚 | 姐勒郷 |
| // 三隊 | 1972 | 193 | 山坡 | 姐勒郷 |
| // 四隊 | 1977 | 136 | 小山丘 | 姐勒郷 |

(出所) 德宏傣族景頗族自治州志編纂委員会(編)1994:672-675に基づき、筆者作成。立地状況の分類は原資料にある説明をそのまま用いた。

出身者、②「開発边疆、保衛边疆」の掛け声に応じてやってきた湖南、保山、施甸、昌寧、龍陵、騰冲などの青年、③北京、上海、成都、昆明などの都市部出身の知識青年、④国营農場の職工の子女、である。国营農場は6つの分場(莫里、坎蘭、賀腮、弄島、勐卯、雷允)と84の生産隊からなっていた[雲南省瑞麗市志編纂委員会(編)1996:364]⁽⁷⁾。

別な資料によれば、1956年から1978年までの期間に、北京、上海、成都、昆明などの都市部から德宏の各地に送り込まれた下放青年は30702人である。そのうち、16000人が農業生産隊に、14702人が農場に送られた。1956年から翌年4月までに693人が昆明から德宏に派遣された。1956年の時点での462人の配属先は、蓮山98人、盈江98人、隴川89人、遮放97人、芒市79人である。さらに、187人の配属先として盈江29人、隴川78人、芒市80人が軍墾農場に送られた。1957年、瑞麗地区の遮相墾殖場にも配属された。1965年12月、四川省成都市から支辺青年227人が各地に派遣された。1968年、北京、上海、成都、昆明からの13782人が各地の農場に配属された。翌年、北京からの1450人、昆明からの2275人が各地の農村に送られ、1971年には成都から9102人が送り込まれた[中共雲南省委党史研究室(編)2011:120]。

2. 帰国華僑

帰国華僑と存在にも着目しておかねばならない。1953年、49人の帰国華僑があったが、翌年には

589人を数えた。しかし、大躍進で減少し、1963年に回復して、229人が戻った。不完全な統計資料ではあるが、文化大革命の時期、4500人ほどが国外に避難したという。1974年には1263人が帰郷した。その後、1978年には約20000人が瑞麗に入境し、その後も増えていた。1984年、瑞麗地区の華僑に対する政策的措置（僑務）の対象者は27437人を数えており、それは当時の瑞麗（県）人口の約4割を占めている。農村部に居住する者が27119人と圧倒的に多い。これに対して、城鎮機関、工場などの職工は171人、農場内の居住者は67人である。同年の別な資料によれば、全県で帰国華僑は5670人ほどおり、農村部の居住者が5648人であった。1987年には帰国華僑連合会という組織が成立した。また、1990年における全県での帰国華僑やその家族・親族は14200万人であった〔雲南省瑞麗市志編纂委員会（編）1996：287-291〕。

傅鳳英という女性について言及しておきたい。彼女の名前を聞いたのは、瑞麗にある観音寺の創建に関しての聞き取り調査時であった。観音寺を管理する男性Y氏（1933年生まれ）の母親は傅鳳英（1905年生まれ）という。彼女は蘭州に生まれた。1930年代から40年代にかけて日中戦争が激化していくなかで、夫が援蒋ルートの物資輸送に従事するようになるが、国民党との関係が深かったため、日中戦争終結後、1946年ミャンマーのヤンゴンに移った。華僑中学で教師をするなどしたが、生計をまかなうために始めた縫製の仕事で成功、使用人を雇って経営した。ウー・ヌ首相夫人とも交流があったという。しかし1968年、ミャンマーで起きた排華運動によって工場は停止となり、中国（瑞麗）に戻った。帰国後、ミャンマー側の知人や華僑などとの関係を活かし、モーゴックで翡翠などを仕入れ、それを瑞麗に運んで商売をした。1982年、弄安（タイ族村落）の一角に観音廟を建立したのだという。今日、観音寺は瑞麗に移り住んできた漢族の人びとやミャンマー華僑にとって日常的な宗教実践の拠点となっている⁽⁸⁾（写真5）。

V 流動人口の定住とローカル社会の再編

1. 経済開発と都市化

前節では、国境を跨いだ地域間交流の変遷について、文化大革命の時期をはさんだ1950年代から80年代までの各時期の状況を概観した。また、国营農場を中心とした漢族移民の入植状況、帰国華僑の増加などについて資料を整理したが、本格的な対外開放体制への転換以前におけるローカル社会の構成がいかなるものであったか明らかになった。以下では、瑞麗はどのような経過をたどって今日あるような徳宏における中枢的な国境貿易都市へと発展してきたかを検討したい。その際、注目しなければならない集団は流動人口である。この人びとは政府主導下における特定の移民政策のもとでこれまで見たような共通の属性を帯びているわけではない。彼らは国家によって組織され、コントロールされた移民集団ではなく、さまざまな動機、経歴、社会階層を含んだ自発的な移民の群れである。すべてがマイナスの存在ではないが、こうした人びとの到来による負のインパクトとして、エイズ、売春、麻薬、犯罪などが多発し、都市空間のなかで彼らをいかに管理していくかが重大問題として認識されるに至った〔劉尚鐸1993〕。

表7は徳宏地域の流動人口に関する資料である。明ら



写真5：帰国華僑によって建立された観音廟（瑞麗市・弄安村）

表7：徳宏及び隣接地域の流動人口（2000年度）

| | 流動人口 | 流動人口／ 総人口(%) | 流動人口密度 (人／km ²) |
|-----|-------|-----------------|--------------------------------|
| 瑞麗市 | 39824 | 25.66 | 39 |
| 潞西市 | 28517 | 8.45 | 9.5 |
| 梁河县 | 5238 | 3.47 | 4.5 |
| 盈江县 | 23076 | 8.58 | 5.2 |
| 隴川县 | 12770 | 7.51 | 6.6 |
| 保山市 | 41162 | 4.86 | 8.2 |
| 騰冲県 | 19981 | 3.36 | 3.4 |

（出所）楊雯・楊韻群 主編 2005：254

かになるように、瑞麗は保山と総数においてはほぼ同じだが、流動人口の人口密度が他の地区に比べて格段に高い。ムセーやナムカムと接し、ミャンマー側の交通・運輸ネットワークとの直接的な連携がある瑞麗地区に新来の移入者が殺到したのである。こうした状況は1980年代後半から国境貿易ブームの活況によって国内外から多くの移入者がビジネスチャンスや仕事を求めて出稼ぎ者、个体戸、商業従事者などが多く居住している事実を反映する数値である。

瑞麗地区における都市化は1980年代になって進行した。1978年以前の時点では、市街区は南卯街と人民路の交差する区域だけであり、1平方km程度であった。しかし、改革開放によって多くの外来人口が急増し、旧来の都市空間だけでは限界であった。1987年、都市化は近郊部に拡大していったが、それはタイ族村落の農地を開発していくことを意味した。周囲には多くのタイ族の耕地が広がっていたからである。1990年、市街区が10.4平方kmに拡大され、主要な6本の市内道路（辺貿大街、辺城大街、南卯大街、瑞宏路、民族街、姐崗路、勐卯路、金融大街）、公園施設（環島街心花園、銀河公園）、市場（辺貿市場、農貿市場）、商号の倉庫区などが建設された。同時に、瑞麗江からナムワン河の口岸に至る8本の公路、渡口（屯洪、芒滾、広喊、丙冒など）が整備された。その後も都市環境の整備と緑化が進んだが、大型の商業施設が旧来のタイ族農村の耕地に代わって、リゾートホテル、大型の商業施設や集合住宅、商号などが瑞麗に新たな都市景観を出現させていく過程でもあった⁽⁹⁾。

2. 貿易拠点の創出

政府は1994年6月に瑞麗市珠寶協会を組織し、瑞麗市工商行政管理局のもと、産業としての健全な育成に努めてきた。これは瑞麗市民政局に登録し、正式な行業社団組織として発足したものである。流動人口は多様な内容を有するが、内容的には多岐にわたっており、中国各省からの個人経営者や企業関係者、農村部の余剰人口、東南アジア側の華僑や華人、香港、台湾、国境に跨って居住する少数民族などを含み、きわめて複雑な様相を呈している。その全貌をつかむことは容易ではない。1950年代から60年代の初め、内地から国営農場建設を目的とした漢族移民の組織的移住、1960年代末から70年代初頭における下放運動による知識青年の移住とは異なった多様な動機を持つ人びとである。

こうしたなかで、瑞麗を特徴づける職業集団として重要な存在は「珠寶」貿易および販売加工などに従事する人びとである（写真6）。2011年の状況を示す資料によれば、従業者の80%以上が、福建、河南、湖南、四川、浙江、広東及び香港、台湾地区から来ている。ミャンマー側から来ている外国人も1万人を数えている。ミャンマー人、ミャンマー籍の華僑、パキスタン人、インド人、ネパール人などである。瑞麗で戸籍に入っている人口8.4万人の都市常住人口のうち、「珠寶」産業に従事している人員は3.5万人で、全体の41.6%を占めている。福建人は「珠寶街」の店舗で卸しと小売に従事している。1000あまりの経営者のうち、福建人はその半数強である。河南人は主に玉雕の生産・加工に従事しており、数千人に達している。この他、湖南人は主に原料の売買に従事している⁽¹⁰⁾。2000年代に入り、瑞麗は「東方珠寶城」というブランドの創出のために、市内各地に大型の関連施設（瑞麗珠寶一条街、姐告中緬街、玉城毛料批發交易市場、華豐珠寶加工工業園區、新東方珠寶城）を建設し、統一したのブランド化の戦略を推進している〔許正苒 2009〕。こうして形成された新たな居住区域には「珠寶」産業に関係する移民の人びとが多く入っている。以下、1980年代以降の流動人口が集中し、しだいに特色を備えるにいたった姐告と珠寶街の変遷をたどってみたい。いずれも瑞麗の「珠寶」産業に深く関わってきた都市のなかの移民コミュニティである。



写真6：珠寶商人

1) 姐告

姐告は瑞麗江南岸に形成された貿易拠点であり、都市空間としての機能の整備がなされ、ミャンマー側のムセーと接する、瑞麗を代する観光スポットでもある。しかし、1988年以前の時点では瑞麗（県）の姐勒郷人民政府が管轄する2つのタイ族の自然村（姐告村、金坎村）と国営農場姐告直屬一隊があった程度で、現在の経済的活況や整備された都市景観からは想像できないほど、急速に発展を遂げてきた。都市としての空間整備が始まったのは1988年である。同年7月、瑞麗姐告工作委員会の発足とともに、国境貿易拠点としての建設工事が大規模に着手された。当時は徳宏地域の国境貿易が過熱化しはじめた時期であるが、ミャンマー政府でも経済改革が始まった時期であり、ムセーは対外開放都市に指定された。こうした状況のなかで、雲南省政府は「姐告辺貿経済区」の設立を推進した。その後、瑞麗江に姐告橋が建設され、大型トラックの通行も可能となり、輸送力が大幅に改善されたが、それは中国とミャンマーとの交通網をつなぐものでもあった。

1992年、姐告は国家級開発区である「瑞麗辺境経済合作区」の重要拠点となり、同年6月、国務院は瑞麗を沿辺経済開発区政策が適用できる国境貿易都市（辺境開放城市）として批准し、対外開放一類口岸に指定した。州レベルの指定から始まった「瑞麗辺境経済合作区」は国家級開発区となった。沿海地域の開放都市と同様、対外経済の管理に関する権限が付与され、162種類の輸入品を免税扱いとする優遇政策が実施された。その結果、国境貿易は急速に拡大していくのである。

姐告を特徴づける貿易品目は多様だが、そのなかで熱狂的なブームを巻き起こし、その分野への参入があったのが翡翠の原石の取引と加工販売を主体とした「珠宝」産業である。「珠宝」は1980年代中後期から「辺境小額貿易」のなかで最も重要な品目の一つであった。原石の取引も含むこうした「珠宝」産業の発展は多大の利益を得ることができることから個人経営者から公司に至るまで、様々な人びとを引きつけた。合法も非合法もあった。翡翠の原石を投機買収するものであったが、しだいに半加工、完成された加工品を扱うようになり、ビジネスとして系統だったものへと発展していった。「中緬商貿一条街」「中緬街」と呼ばれた姐告とムセーが面している国境地域の貿易ゾーン（国境線81号附1号、附2号、82号から83号の「界碑」の両側で全長1.5km）には多くの「珠宝」商人が集まって珠寶街が形成された。鄭によれば、1995年前後の時期は瑞麗の「珠宝」貿易が最も発展し、繁忙であったという。当時、ミャンマー政府は、原石に対する管理が緩やかで、原石は基本的に陸路で瑞麗を経由して中国に輸入され、そこから全国に向けて発送された。特に、広東、四川の同業者は自ら購入にやってきたという。瑞麗では多くの商号が設立された。1998年からはミャンマー政府が「珠宝」ビジネスに対して緩和策を採用し、ムセーをミャンマー国内で産出する翡翠の陸路で中国側に輸出できる唯一の貿易拠点としたこともあり、ムセーに接した姐告には中国内外の商人が集まった。その後、ミャンマー政府が原石に対する管理を強化し、「公盤」で競り落とされた後、海路で広東に輸送するようにしたため、2000年以降からは瑞麗の「珠宝」産業に以前ほどの活気がなくなったとはいえ、姐告の中緬街は依然としてメッカ的存在である⁽¹¹⁾。

1990年代にここにやってきて起業し、店舗を持つに至った一人の経営者の略歴を紹介しておこう。福建省出身で中緬街居民小組組長を務めている白湖南氏である。彼は1991年に知り合いの紹介で瑞麗にやってきた。当時、家は貧しかったので、元手となる費用を何とか工面し、数千元を集めた。やってきた頃は政策が緩やかであったので、国境線の両側で商売でき、何の手続きも必要としなかった。妻と二人で、露天で商品を販売した。ミャンマー側から仕入れた化粧品や衣服を扱った。5、6年が経ち、一定の蓄財もできたので、1996年に「珠宝」を扱う商売に切り替えた。品物を提供してくれるミャンマー人の商人との間に安定した関係を築いているが、彼らが品質の良い原石を仕入れ、それを広州に運んで加工する。しかし、すこし質の劣るものは中緬街で加工している。時々ミャンマーに行くが、関係を持っている相手はミャンマー側の華僑である。商売仲間のミャンマー人も漢語が話せるので特に不便はない。自分の兄弟や妹、妻の兄弟、さらには福建にいる数十人の親戚もみな雲南に移ってきており、騰沖は麗江などで商売をしている。福建にあった戸籍を瑞麗に移している [郭家驥 2010: 252]。

2) 珠宝街

珠宝街は「瑞麗市珠宝街」と命名され、観光のスポットの一つである（写真7）。1992年に中国では初めて創設されたので「中華第一珠宝街」と呼ばれ、話題となった。1987年5月、辺民互市の拡大と国境貿易を促進するために施設が建設され、それが発展して「珠宝」取扱業者が集中する移民コミュニティとなっていた。この地点が貿易拠点となったのは1952年である。瑞麗県政府は新しく城鎮（新街子）を建設した。これは「老城子」から1kmほどの地点にあり、人民政府や政府機関の建物はみな「新街子」に建てられた。その後、「小額貿易管理弁法」が制定され、国営・私営の会社はいずれも外国製の物資を扱うことができるようになり、瑞麗国営民貿公司が新街子に建てられた。この「新街子」が瑞麗（県）の政治・



写真7：瑞麗市珠寶街

経済の中心として、国営民貿公司の経営する小額貿易が発展していく。こうして形成された瑞麗辺貿興市街が珠宝街の前身である。当時の「珠宝」貿易の規模は小さく、レベルも低かった。すなわち、个体戸などがムセー、ナムカムなどに赴いて少量を購入してきて露天で販売するというものであった。徳宏州政府が1985年に対外開放を決定した後の数年間はこのような状態であった。1990年代になり、徳宏州の観光化が始まると、瑞麗はミャンマーとの国境貿易で活況を呈するに至る。瑞麗は上述した姐告とともに、人気のスポットになった。原産地のミャンマーから直輸入された翡翠の指輪や装身具などが比較的安価な値段で入手できるとあって、中国人の間で大きな話題になったのである。そのため、ビジネスチャンスのある瑞麗で一攫千金を狙う個人経営者が多く集まってきた。そうしたなかから店舗を開く経営者が現れ始めた。この時期の「珠宝」の商売は各人各様であり、また扱われる「珠宝」の品質も文字通りの玉石混淆状態であり、偽物も多く出回った。その後、業界関係者の連携によって瑞麗市珠寶協会と珠寶鑑定センターが発足し、「珠宝」市場の規範化と秩序化が行われ、市場としての安定が図られた。しかし、今日のような整備された珠寶街でなく、衣服、雑貨、化粧品、美容室、彫刻・民間工芸品、飲食店などが雑多に混在していた。経営者のほとんどは中国各地からやってきた「个体戸」であったが、ミャンマー人やインド人も多く混じっていた。2002年1月、市政府は旧式の設備や古くなった建築物を撤去し、「東方珠寶城」のイメージにふさわしいショッピング・ゾーンとして珠寶街を整備した [何春嶸 2006]。

この珠寶街でいち早く店舗を開き、着実な商売によって顧客の信用を高め、経営を安定させた一人の人物によって確認しておこう。瑞麗を代表する模範的な人物としてメディアでも取り上げられる柯文聡氏である。略歴は以下の通りである。出身は福建省泉州で、初級中学の卒業後、彼は父親が請け負うレンガ工場で働いた。20歳になった時、タクシー会社でアルバイトをしたが、給与は1ヶ月120元であった。その後、自分の車を得て仕事に精を出したが、23歳になった時、もっと収入の良い職業はないかと、江西、湖北、広東など中国各省を見て回った。そうして1年間を経て出した結論は、自分には資金も知識も足りず、大都市ではチャンスがないということであった。同郷人の勧めもあって、辺境の瑞麗にやってきた。最初にやってきた時、金儲けができるモノを発見した。それは道路沿いに並べて売られていた「戒面」である。1個を5、6円で仕入れて郷里にある貴金属店に持って行くと、2～30元になったのである。彼はこうして瑞麗と福建を往復するようになり、1年後、妻子とともに瑞麗に移住した。当時、瑞麗ではまだ「珠宝」店がなく、みな地面に並べて販売していた。彼もそうした段階から商売を始めたが、合法的な経営権がなく、工商局、税関（海関）がやってきて捕まってしまう時もあり、すべて没収されることもあった。しかし、転機がやってきた。1992年、瑞麗市政府は「珠宝」産業を発展させる方針を打ち出し、市内の中心に関連の施設を建設した。これを知った彼は、十分な資金がなかったが、店舗を買うことを決意した。彼が珠寶街に移ってきた頃はまだ6、7軒の

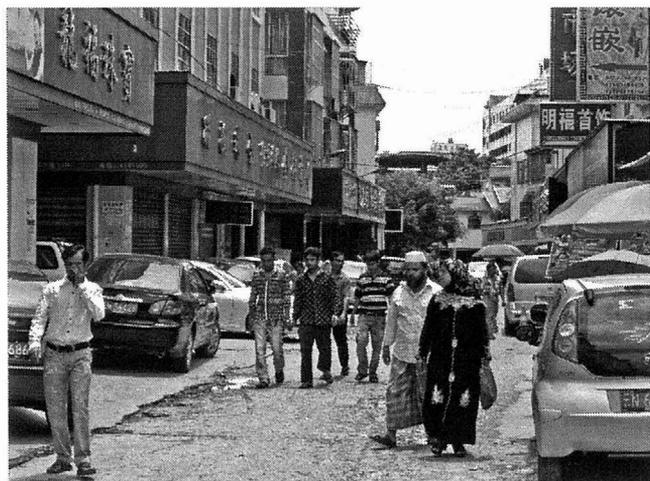


写真 8：瑞麗市珠寶街に居住するミャンマー人

店しかなかったが、続々と増えていたからである。1996年、市場には「B貨」と称される偽物が出現し、値段は安かった。何も分からない客たちはこれを買うようになり、彼の店も打撃を受けたが、本物だけを扱って品質と信用の保持に努めた。彼の経営する店舗は「雲南省著名商標」と「徳宏州重点扶植商標」を得て、名店の一つになっている。彼は瑞麗市珠寶協会の副会長を務めると同時に、珠寶街を統括するリーダー格の人物として中国共産党に入党し、商業空間としての都市コミュニティの秩序を保持する側の任務を担っている⁽¹²⁾ (写真 8)。

彭覚氏 (1964年生、ミャンマー人男性) は瑞麗市珠寶玉石協会の副会長、瑞麗ミャンマー商会会長などの要職を務める。1990年、1万元 (人民元) を持って32歳で瑞麗にやってきた。やってきたばかりの頃は資金もなく、ほかの同業者と同様、市内で露天売りした。瑞麗にやっ

てくるミャンマーの商人が何かトラブルや困難に出くわした時には助けを求められるようになり、しだいにリーダー的な存在になった。積極的に市政府と協力し、中国とミャンマーのビジネス界の橋渡し役を演じている。2003年、瑞麗市宝玉石協会の副会長になった。すでに1000人以上のミャンマー人に瑞麗で「珠寶」の商売をすることを支援してきた。英語のほかに、中国語も話せる。瑞麗市工商局の役人は、彼に工商管理の方法や政策、法律などをミャンマー語に翻訳させ、関連政策の宣伝や普及に努めている。また、ミャンマー人側の商人に対する営業許可書の作成、偽物の排除、取締などにも協力を得ている。瑞麗の珠寶街で商売しているミャンマー人は1000人を超えているとされ、登録している個人経営者は300余りである⁽¹³⁾。

VI 都市形成と移民集団、ローカル権力

民国期までの瑞麗では、ローカルな統治権力と漢族の移民集団との関係はほとんどなかった。タイ族の統治拠点が勐卯街 (老城子) の土司官署を中心としたものであったのに対し、設治局は漢族が多く居住する弄島地区にあったからである。この段階における漢族人口は少なかった。1950年代以降、社会主義建設の過程で、政府関係諸部門に働く人びとや国営農場の関係者がしだいに増え、また、帰国華僑も瑞麗の住民構成の一部となった。最初の段階では昆明、保山、徳宏州内の各県市から来た人びとが瑞麗地区における社会主義建設の推進役になってきた。その中では保山人が最も多いという。彼らは建築、貨物輸送、個人経営の商売、養殖、農業などの分野に関わってきた。漢族移民は出身地もしだいに多様化してきたが、改革開放への移行にともない、様々な産業分野に外来の人びとが参入している。ローカルな瑞麗地区の経済を牽引しているのは、こうした外来の移民集団である。福建、広東、四川、湖南などの「外省」出身者が大量に流入している。同郷者のネットワークを基礎に四川商会、福建商会、湖南商会、浙江商会等なども創設されている。今日、瑞麗の経営者は大企業から小店舗に至るまでが「外地人」である。以下では福建出身者を対象に、ウェブサイト上の関連資料を整理しておきたい。

事例 1 鄭振泉氏は福建省晋江出身である。徳宏州福建商会、瑞麗市珠寶玉石協会の会長職を務めている。1982年、瑞麗にやってきた。わずか66元の資金から起業した。1995年には瑞麗市協興、協進、協旺という貿易有限公司を創業した。1997年4月、鄭振泉は25名の福建省出身者とともに徳宏州福建商会を創設した。会員及び会員企業の業種は国境貿易、不動産開発、珠寶玉器、装飾

品加工、建設資材（五金）、電化製品、タバコ・酒・副食品など、30以上の業種にわたっている。2000年、600万元を超える資金を投資し、瑞麗で最大の商業施設である閩瑞商場を建設した。瑞麗珠寶協会会長として「瑞麗珠寶」という商標を申請したが、2007年4月、瑞麗市珠寶街は「雲南省百城万店無假貨活動示範街」に認定された。瑞麗市協興貿易有限公司董事長のほか、中共雲南省委政策研究雲南政策諮詢顧問理事、ヤンゴン光華商会名誉会長、ヤンゴン福建同郷總會名誉会長、マングレー福建同協会名誉会長、雲南省福建商会常務副会長、州政協商常委、徳宏州工商連副会長、瑞麗市珠寶協会会長などの要職を務めている⁽¹⁴⁾。

事例2 洪光亮氏は1969年、福建省晋江市に生まれた。洪順集団股份有限公司の董事長である。1987年、18歳で郷里を離れ、瑞麗にやってきた。1995年3月、洪順実業有限公司を設立し、2000年に総部を昆明に移した。そして西双版纳和順有限公司、河口華順貿易有限公司、姐告恒森進出口有限公司、昆明洪順物流有限公司、厦門洪順進出口有限公司を設立した。これらを基礎に、2005年、洪順集団を発足させた。ミャンマーとの合弁企業の鴻運集団、ベトナムの全資企業の銀象国際貿易有限公司、恒生国際貿易有限公司も創設した。紡績原料、建築資材、自動車及び整備などの販売ネットワークを作り上げている。タイ、ラオス、マレーシア、南アフリカ、パナマ、委内瑞拉、アメリカ、日本との輸出入貿易を幅広く展開している。「珠寶」産業にも参入し、昆明、瑞麗、騰冲、厦門、佛山平洲、北京などに支店を開いている⁽¹⁵⁾。

事例3 張文明氏は550元を元手に親戚を回って資金を集め、1987年7月、瑞麗にやってきた。最初は化粧品、腕時計などを扱った。一定の資金が蓄積できた後、タイ製の蚊帳、衣装などを仕入れて商売を続けた。こうして5、6年が経ったが、貨物の輸出入へと業務を拡大した。ミャンマー側から商品を輸入し、中国の商品を輸出した。2001年、衛生設備と配管関係の貨物の利益が大きかったので、その分野に進出した。2004年、不動産業にも進出した。2005年、280ムーの土地を購入し、建物を建てた。1320戸の商人が入居でき、2年で80%が完売した。そのうちの75%は中国人であり、25%がミャンマー人であった。2008年、政治協商委員会に加入した。また、瑞麗市鴻運房地產開発有限公司副總經理に就任、翌年には瑞麗市鑫盛房地產開発有限公司を設立し、瑞麗市金海物流管理有限公司の總經理になった。雲南省徳宏州福建商会常務副会長兼秘書長を務める⁽¹⁶⁾。

事例4 葉金国氏は福建省莆田出身である。徳宏州には52の金店があるが、そのうち莆田人が経営するのは49店舗あるという。そしてそのうちの四分の一が瑞麗に集中している。葉金国は比較的早い段階で瑞麗にやってきた人物である。玉球集団の董事局主席兼総裁という役職を務めている。その他、翡翠世紀城房地產開発有限公司、瑞麗市勐卯首飾有限公司、瑞麗市明成賓館、瑞麗市中欧三星級大酒店を経営している。1991年、西部大開発のブームが起きると、瑞麗口岸の視察にやってきた。瑞麗には大きなビジネスチャンスがあると確信し、勐卯首飾有限公司に投資した。しかし、1997年金融危機が起り、会社は大打撃を受けた。だが、投資や経営のあり方を合理化し、何とか聴きを切り切った。その後は企業経営の集団化を進め、ホテル業界に進出した。明成賓館、中欧三星級大酒店を開業した。彼の家族も瑞麗で起業し、金融（宏瑞金行、宏鑫金行、閩南金行）、ホテル経営（豪順酒店、南方賓館）などに従事している。翡翠ビジネスの拠点である「玉球」はマングレーに店舗を構え、かなりの知名度がある。2009年、玉球翡翠中国総部を建設した。「玉球翡翠」のブランドは中国国内で広がっている。北京、雲南、山西、新疆、山東、内モンゴ、福建、浙江、広西、河南などの各省市に加盟店がある⁽¹⁷⁾。

以上の事例から明らかになるように、外地人は家族・親族や同郷出身者のネットワークを形成しつつ、多様な分野に進出し、瑞麗地区の経済開発や地方経済の基盤を形成している。そしてローカル権力としての瑞麗市政府が進める経済政策をその資金力によって実行し、推進する側の主要な担い手とし

て、各種のビジネス・産業界のネットワーク化や高度化、都市開発などを通じてローカル社会の再編に深く関与するまでになっている。2000年代に入って瑞麗では都市区域の拡大のために、タイ族農民の耕作地や村落共有地の徴用が大かぎりに進み、企業や公司による大型の商業施設や工場、倉庫などが建設されている。例えば、徳龍国際珠寶商城、芒沙国際商貿城、南亜紅木家具国際博覽中心などは、市内を一回りすればすぐ目に入ってくる建築物である。至る所には建設工事が進む大型施設がある。それは、1990年代前半まで市街地周辺で見られた広々とした農村風景とは全く異なった都市景観を構成しはじめている。こうした都市開発を可能にする力は、行政各分野の政策決定を掌握するローカル権力と労働力とネットワーク、資本力を誇る外地人との合同や提携から生み出されている。各種の大型施設は新たに中国内外から入ってくる流動人口を吸収する役割を果たしている。市政府は2009年6月の時点においてすでに勐卯鎮を構成する7村民委員会42村落の土地に対して徴用の手続きを完了し、22の村落では耕作地その他の土地の使用権限が完全に政府や企業、投資家の側に移されている。当然の帰結として、タイ族農民の側では離農せざるを得ず、「失地農民」として、これまでの第一次産業従事者から第二次、第三次産業の職種への転換を迫られている。これは村落農民の側に収入格差を生み出す要因ともなっている。都市区域の中心部に位置し、立地条件のよい村落では、商号の倉庫や集合住宅、商業施設などの用地として提供し、その借料によって生計を立てるようになっている。例えば、團結村委会の上弄安村民小組（2011年度統計、87世帯）ではほとんどの世帯が借地や借家、アパート経営などで生計を立てているが、表面的な観察の範囲に限定されるが、生活に困窮する状況にはない。村内では数階だてのコンクリート建築の工事が至るところで進められている。そこには外地から入ってきた出稼ぎ労働者を多数見かけたが、そのなかには肌の色において明らかに漢族とは異なった風貌のミャンマー人などが含まれている。しかし、能力や技能などの点でどのように転身を図るかの方法も見つからないタイ族農民の方が圧倒的に多いという。「失地農民」問題をどのように解決していくかが政策的な課題として浮上しているが、これは新来の移民集団が瑞麗地区の開発計画や土地活用に受益者として関わり始めたことと対照的である。利益の異なる様々な主体が交渉し合う磁場として土地を徴用されたタイ族村落で進行している社会文化動態の解明は今後の課題である。

VII 今後の研究課題

1980年代以降、中国政府は雲南省を東南アジア、南アジアに対する戦略的拠点と位置づけ、国境に跨るローカルな地域経済圏の創出にきわめて積極的である。その動きはますます加速されている。これは国境に接した貿易拠点を経済開発区や貿易区に指定し、その人口集中化を図り、一定規模を有する交通、運輸、情報・通信、メディアなど、インフラ整備を伴った都市空間を建設しようとするもので、伝統的な生業に従事してきたローカル社会の人びともこうした動きのなかに取り込まれている。今日の国境地域の社会文化動態やネットワーク形成、メカニズムを明らかにしようとする時、こうしたマクロな視点からの検討は不可欠である。

多くの民族自治州や民族自治県が国境地域に位置し、主要な民族集団だけでも20を超える種類を有する雲南省では、1990年代になると「民族文化大省」の建設というスローガンのもと、対外開放政策と経済発展戦略が展開し、それぞれの地域における民族的多様性や彼らの伝統文化などの資源を活用する、ローカル色のある地域開発が進められ、ローカル社会は大きな変化の過程のなかにある。瑞麗も徳宏州のミャンマーとの国境貿易の拠点として、あるいはエスニック観光のスポットとして人気を集め、中国内外から多くの人びとを引きつけてきた。こうした際に、注目していかなければならない集団が中国各地、あるいは国外から国境を越えて入ってきた人びと、すなわち外地人である。彼らは常に移動しつづけるフローな存在ではなく、ローカル社会のなかから自らの生きる活路や糧を見出して定住化へ向かう集団である。対外開放や市場経済の進行のなかで、特定分野のローカルな資源を自らの

富の源泉として開発し、脱地域的でグローバルな動きのなかで本領を発揮する一方、ローカル社会をつなぐ媒介者としての役割を帯びている。本報告で検討した「珠宝」を生業としながら、しだいに経済力を高め、瑞麗地区の開発過程に参入していく過程が如実に示すように、こうした移民集団は、全ての人びとに当てはまるという訳ではないものの、各種のネットワークを巧みに組み合わせて経済的利益を獲得し、ローカル社会やそれを統治する側の政治権力と交渉連携し、地域開発戦略の策定や経済活動、文化事業などの面で影響力を及ぼしはじめているのである。

中国西南地域と東南アジア大陸部は、地理的連続性のなかにフロンティアの属性を併せ持つ複合社会が歴史的に形成されてきたが、移民集団は重要な役割を果たし、ローカル権力の形成やその動態とも密接な関係を保持してきた。漢族移民の雲南への流入の歴史は古く、明代以降に展開されてきた屯田政策などはその典型的な事例でもある。今日、瑞麗で進行している状況を作り上げているのは、自発的な移民集団のフローであり、上からの主導による政策的な移民ではない。しかし、連続性も見取れるのではないだろうか。いずれにしても、国境地域における人口移動と移民集団のネットワーク、ローカルな政治権力・経済構造との関係はフロンティア研究のための分析対象となる資料収集レベルの精緻化と合わせて、今後、多方面から検討が進められていくべきであろう。フロンティア空間は国境地域のグローバル化とともに日々その様相を更新している。雲南とミャンマー、ラオス、タイ、ベトナムを繋ぐ地域間関係のなかにあるローカル社会を対象に、移民集団、ネットワーク、ローカル権力が相関するメカニズムを動態的に把握していくことが必要である。そのことによって目下生成の過程にある「国境文化」の内実が明らかになってくるであろう。

注

- (1) 同地域には千畝以上の面積を有する盆地（壩子と呼ばれる）が28個ある。その中で南甸盆地（1040～1200）、盈江盆地（800～950）、濞西盆地（1040～1120）、隴川盆地（940～1040）、戸撒盆地（1400～1520）、瑞麗盆地（740～880）、芒市盆地（880～970）、遮放盆地（800～880）などが中核となる盆地（括弧内は海拔高度〔単位：メートル〕）である〔徳宏傣族景頗族自治州志編纂委員会（編）1994：108-109〕。
- (2) 徳宏州政協文史和学習委員会（編）1997。隴川上司については、以前に関連資料をまとめ、検討を加えたことある〔長谷川2009b〕。あわせて、長谷川2010も参照。
- (3) 王介南・王全珍1996：90-93、徳宏傣族景頗族自治州商業局（編）1991、〔陸韜1997〕。
- (4) 瑞麗は1980年代の改革開放政策への転換以後、様々な知識や技術を持った外来の移民によって発展してきた都市である。「瑞麗：一座開放包容的移民城市」（<http://www.yn.chinanews.com/pub/html/special/2012/0817/9772.html>）を参照。中華人民共和国の成立以降における瑞麗の歴史の変遷や基本データについては、中共瑞麗市委・瑞麗市人民政府1993、雲南省瑞麗市志編纂委員会編1996：79-97、中共瑞麗市委・瑞麗市人民政府2008、中共瑞麗市委・瑞麗市人民政府2009、等。
- (5) 以下を参照〔雲南省瑞麗市志編纂委員会編1996：291-293、488-490〕。
- (6) 徳宏傣族景頗族自治州志編纂委員会（編）1997：201、雲南省瑞麗市志編纂委員会（編）1996：489-490。
- (7) 瑞麗市図書館所蔵の国営瑞麗農場編『瑞麗農場志』（刊行年不明）を参照。
- (8) 2009年8月11日、2012年3月25日、瑞麗市内の観音寺（下弄安村）で聞き取り。
- (9) 中共瑞麗市委・瑞麗市人民政府2009：364、陳江1993：92。
- (10) 「瑞麗珠宝街寸土寸金源于城市改造」（2009年05月20日 www.ynta.gov.cn/Item/68.aspx -）、「打造珠宝產業集群 打響東方珠宝城品牌—対話瑞麗市市長刀晓瑞」（http://www.elht.gov.cn/ztlm/kfksyq/ynrl/201111/t20111102_709974.html）を参照。
- (11) 以下の研究が参考になる。姐告経済区管委會弁公室1993、張彭建1999、王達章1999、畢世鴻2010、等。<http://tlgjzb.gov.cn/r/xy/frw/fmj/6748770554243.html>「瑞麗：珠宝更耀眼 要靠“铁公机”」、www.yn.xinhuanet.com、「瑞麗：推进文化与旅游相融互动」、等。
- (12) 柯文聡については、「開珠宝店賺錢嗎記雲南百美珠宝有限公司總經理 柯文聡」（<http://www.86722.com/licai/i32059/>、<http://www.dk36.com/news/14446328.html>）。
- (13) 「緬甸商人任雲南瑞麗義務“紀檢幹部”」（<http://www.yn.chinanews.com/pub/html/special/2012/0824/9914.html>）。

「瑞麗市宝玉石協会副会長彭覺自曝賭石經歷」(http://news.yntv.cn/content/16/20100712/090259_16_51709.shtml)を参照。

- (14) 以下の記事を整理した。「情系辺疆 感恩思進—記瑞麗市協興貿易有限公司董事長 鄭振泉」(http://blog.sina.com.cn/s/blog_791a2b680100tw1o.html)、「訪瑞麗市珠寶協會會長鄭振泉」(<http://www.ynzby.com/promotion/index.php?c=lores&a=details&id=28>)。
- (15) 以下を参照。「踏着时代的潮声起航—記洪順集团股份有限公司董事長洪光亮」(<http://www.ruil.gov.cn/Ganen/dianxing/2010-4/17/RuiLi@10417175462.html>)、「洪光亮的翡翠之路」(http://www.998yuqi.com/article/Detail_632550_103101_%E5%90%8D%E4%BC%81%E4%B8%93%E8%AE%BF.shtml)。
- (16) 以下の記事を整理した。「記瑞麗市鴻運房地產開發有限公司副總經理 張文明」(http://blog.sina.com.cn/s/blog_791a2b680100tw1l.html)。
- (17) 以下の記事を整理した。「飛舞在彩雲之南—記瑞麗市玉球集團董事局主席兼總裁 葉金国」(http://blog.sina.com.cn/s/blog_791a2b680100tv8.html)。

参考文献

畢世鴻

2010 『中国とミャンマーの国境貿易に関する研究』日本貿易振興機構アジア経済研究所、457号。

蒼銘

2004 『雲南辺地移民史』北京：民族出版社。

陳江

1992 「瑞麗口岸」李成鼎・何明主編『雲南辺境口岸貿易指南』昆明：雲南民族出版社、35-50頁。

德宏傣族景頗族自治州商業局（編）

1991 『德宏州商業志』芒市：德宏民族出版社。

德宏傣族景頗族自治州志編纂委員会（編）

1994 『德宏州志・総合巻』芒市：德宏民族出版社。

1997 『德宏州志経済巻（下冊）』芒市：德宏民族出版社。

德宏州史志弁公室（編）

2009 『德宏年鑑 2009』芒市：德宏民族出版社。

德宏州政協文史和學習委員会（編）

1997 『德宏土司專輯』芒市：德宏民族出版社。

德宏州政協文史資料委員会（編）

1999 『德宏解放五十周年親歷記』芒市：德宏民族出版社。

方鉄・方慧

1997 『西南辺疆開發史』昆明：雲南人民出版社。

郭家驥

2010 『雲南民族關係調查研究』北京：中国社会科学出版社。

長谷川清

2009a 「宗教実践とローカリティー—雲南省・德宏地域ムンマオ（瑞麗）の事例」林行夫（編著）『〈境域〉の実践宗教—大陸部東南アジア地域の宗教のトポロジー』京都：京都大学出版会、131-170頁。

2009b 「雲南タイ族の事例—中華世界における『宗教』と『民族』」岡洋樹（編）『内なる他者—周辺民族の自己認識のなかの「中国」』東北大学アジア研究シリーズ第10号、11-37頁。

2010 「人の移動と民族間関係、文化的アイデンティティの動態—雲南ミャンマールート、德宏傣族の事例」塚田誠之（編）『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北—』東京：有志舎、45-83頁。

何春嶸

2006 「打造德宏瑞麗東方珠寶玉石之都的可行性研究」中共德宏州委政策研究室（編）『建設美好家園—德宏傣族景頗族自治州新世紀發展戰略与決策』昆明：雲南民族出版社、105-111頁。

姐告經濟区管委會弁公室

1993 「姐告—德宏第一块經濟開發区」吳志強（主編）『改革開放中的德宏』芒市：德宏民族出版社、95-97頁。

劉尚鐸（主編）

1993 『開放与探索—德宏边境口岸社区管理研究』昆明：雲南人民出版社。

瑞麗改革開放三十編委会（編著）

2009 『瑞麗改革開放三十年』瀘西：德宏民族出版社。

王達章

1999 「姐告開發建設十一年回顧」德宏州政協文史資料委员会（編）『德宏解放五十周年親歷記』芒市：德宏民族出版社、230-242 頁。

2009 「莫道彈丸地 南疆一明珠—姐告边境貿易区改革開放 20 年紀實」前揭『瑞麗改革開放三十年』、62-68 頁。

王介南·王全珍

1996 『中緬友好兩千年』芒市：德宏民族出版社。

稀承文（編）

1993 『超越邊境貿易的抉擇』昆明：雲南人民出版社。

許正苾

2009 「五園区展示發展歷程 碧玉妝璫邊陲明珠—記發展中的瑞麗珠寶玉石產業」前揭『瑞麗改革開放三十年』、311-314 頁。

楊雯·楊誼群（主編）

2005 『雲南人口研究』昆明：雲南大學出版社。

盈江縣志編纂委员会（編）

1997 『盈江縣志』昆明：雲南民族出版社。

雲南省瑞麗市志編纂委员会（編）

1996 『瑞麗市志』成都：四川辭書出版社。

張建章·楊雲吉編著

1993 『有一個美麗的地方』芒市：德宏民族出版社。

張彭建

1999 「八十年代德宏州的改革開放」德宏州政協文史資料委员会（編）1999『德宏解放五十周年親歷記』芒市：德宏民族出版社、172-182 頁。

中共瑞麗市委·瑞麗市人民政府

2008 「瑞麗改革開放 30 年回顧」德宏改革開放 30 年編委会『德宏改革開放 30 年（下冊）』芒市：德宏民族出版社、653-665 頁。

2009 「開放的東方珠寶城」瑞麗改革開放三十編委会（編著）『瑞麗改革開放三十年』瀘西：德宏民族出版社、361-367 頁。

中共雲南省委党史研究室（編）

2011 『雲南知識青年上山下鄉運動』昆明：雲南大學出版社。

周琮

2007 『清代雲南瘴氣与生態變遷研究』北京：中國社會科學出版社。

朱昭華

2007 『中緬边界問題研究—以近代中英边界談判為中心』哈爾濱：黑龍江教育出版社。